

『信じる幸い』(ヨハネの福音書 20 章 24-29 節) 2020.4.19.

<はじめに> 私たちが生きる世界は玉石混交、本物と偽物が入り交じり、それを見分ける眼力が求められます。すべてを拒めば影響受けませんが、狭い世界に自分を閉じ込めます。今は安易に信じない時代です。しかし、イエスは「信じる者は幸いです」(29)と言われました。

I 「私たちは主を見た」(24-25)

①いなかったトマス(24⇒19-23)

主イエスは甦られた日の夕方、弟子たちのいた部屋に来られた時、トマスは不在でした。他の弟子たちが部屋に閉じこもる中、彼はどこへ何をしに行っていたのでしょうか。街に出ることが怖くなかったのでしょうか。

②仲間の証言(25)

トマスが戻って来ると、弟子たちが「主を見た」と言います。彼には信じ難いことでしたから、素直に反論しました。本当に主だったのか、主ならば十字架の傷跡があるはずで、それを見たのか、自分なら触って確認する、と主張します。

③信じない理由

「見たことがない」は自分の経験値を、「聞いたことがない」は証人の真実さを判断材料とします。トマスを懐疑主義者と呼ぶのには賛同できません。信じるに足る揺るがない証拠を求める人です。彼が信じる根拠は自分の納得です。それが揃うまでは信じません。

II 8日後の出来事(26-29)

①再び主が来られ(26)

1週間前、トマスに弟子たちが報告した通りの状況が再現されました。違うのはトマスがいたことです。主はなぜもう一度来られたのでしょうか。主を再び見た弟子たちと、初めて見たトマスに、この出来事が何をもたらしたのでしょうか。

②あなたの指と手を(27)

ここからはこの日独自の展開です。この主のことばから、イエスとはどんな方だと言えるでしょうか。主のことばを聞いたトマスと弟子たちはどんな心境で、何に気づいたのでしょうか。トマス(あなた)と主(わたし)が向き合うことで、両者の関係に変化が表われます。

③「私の主、私の神よ」(28-29)

姿を見、声を聞き、存在に触れる経験こそ、人格の交わりです。「私の主、私の神」であるイエスが甦られて、今生きておられることをトマスは受け取りました。彼が信じるためには、幾つかの証拠が必要でした。私がイエスを信じるには、何が必要ですか。

III 信じる人たちは幸い

①証拠を信じるのか

科学的真理は再現性の上に成立しますから、一回性の出来事は蚊帳の外に置こうとします。イエス・キリストの復活も一度きりですから、対象外とされます。それでも聖書はイエスが葬られた墓は空だった(2, 6-7)という揺るがぬ証拠を示しています。

②自分は信じられるのか

私たちがトマスのように自分の理解・納得を大事にしますが、それにも限界があります。識者・権威ある者の証言を借りることもあるでしょう。そもそも自分は信頼に足る者でしょうか。「私」はすべてを理解し、公正に判断できる者でしょうか。

③イエスは信じるに値するのか

イエスが言われる「信じる」とは、生ける人格なる神との出会いです。事実・実在は証拠・証言を越えた領域です。対面し、語らい、触れ、その働かれる様子を見ることを通して、「私の神、主は生きておられる」と告白します。それは私たちの生き方を変えます。

<おわりに> 甦られた主は、今も生きておられ、私たちの前に現れ、語り掛け、ご自身が生きて働いておられることを示されています。私たちは主イエスを肉眼では見なくても、信じるに足る御方だと受け止めて、「私の主、私の神」と信じますか。それはどうしてですか。(H.M.)